未知の医療ニーズ〝東京歯科〟が光を当てます（金子）
予防医療の〝担い手〟歯科医の新たな使命です（亀井）

金子　譲
東京歯科大学
理事長

大学として〝未来への貢献〟は「人づくり」精一杯やります！

医療コラム「未病の憂い」の〝特別対談〟。前半の記事は好評をいただきました。対談「後編」では歯科の未来について話が進みます――。

――対談後半は、具体的な〝未来像〟という点を読者にお示しいただければ。

亀井　臨床の立場から〝歯科医の新たな役割〟ということをお話しましたが、私のクリニックで進めている〝歯科身体総合医療〟というものをさらに発展させていきたいと考えます。歯周病と生活習慣病の関係に代表される〝口腔に現れる全身疾患のサイン〟を専門外だからと見過ごさず、医療のあり方などを深めていきたいですね。金子理事長が大学トップとして進めおられる〝歯科医療の未来像〟をお話いただけますか？

金子　人材育成を基にした本学の「多機能化」ということでしょうか。医療系の大学には、教育・研究・臨床という三大機能に加え、プラスアルファが求められつつあります。〝プラスアルファ〟というものは、当然、従来の大学の機能の総合力として出てくるものですが、良い意味で世の中の〝期待を裏切るような〟もの。旧来の延長線上にあるようで、世の中の新たなニーズに応え得るようなものです。iPS細胞研究のように社会の皆さんにとって分かりやすい研究や発明でなくとも〝東京歯科だからできた〟あるいは〝東京歯科には～に長けたヒト（歯科医や研究者）と情報がある〟とさらに多くの皆さんに認めていただけるような大学にするのが私の務めです。力のある研究者、教授陣、高いポテンシャルを秘めた学生など、大学の資産はやはりヒトです。彼ら彼女らのさらなる飛躍のため、大学トップとしてもう一段アクセルを踏み込む時期は今しかない。今日の人づくりがなければ、歯科医療の未来は訪れない。今日の歯科医療も、先人たちの努力の結果に過ぎないわけですから。いつの時代も人づくりこそが今を生きる我々にできる精一杯の未来への貢献なのです。亀井先

口に現れる〝病気のサイン〟に注目
〝超早期予防〟には遺伝子検査も

亀井英志
長栄歯科クリニック
院長

生が進めてこられた〝歯科身体総合医療〟も、大事なのは〝担い手〟の育成という点ではないでしょうか。

亀井　おっしゃる通りです。当クリニックの研修医や、つながりのあるベテラン歯科医、大学勤務医などと勉強会や研究会などを開いてその重要性を皆は認識している一方、具体的にどのように診療に落とし込んでいくかというのは、これからの課題です。色々なアプローチを試していますが、より多くの歯科医の皆さんが、従来の診療の中で簡単にトライできることとして〝歯科の定期健診〟を患者さんに勧めるというのが、上手くいっているスタイルです。糖尿病の方や、その予備軍の割合が高い中年以上の患者さんには半年とか、年一回の健康診断と同じような感覚で〝歯科に〟来ていただく。すると〝歯が痛くなくても時々歯医者に行くことの効用〟つまりは病気の早期予防ということですが、その効用を分かっていただけた患者さんが当クリニックでもここ数年で相当増えました。

金子　亀井先生のクリニックが、患者さんにとっては実質的な〝かかりつけ医〟になっているというのは、すばらしいですね。〝痛いから歯医者へ〟は当たり前ですが、口腔疾患の予防はもちろん、口腔内に現れる、全身疾患の兆候、いわば〝病気のサイン〟を指摘することは亀井先生がおっしゃられる歯科医の〝新たな役割〟として普及していって欲しいものです。糖尿病だけでなく、重大な疾患の兆候が口腔に現れることが、研究などでも証明されている一方、その情報が患者さんの下に届いているかという点ではまだまだです。予防医学的な見地から歯科医の役割は小さくない。本学の先人たちも、十九世紀後半の創立時から〝口も体の一部〟という高い意識で患者さんと向き合ってきました。

亀井　金子先生がおっしゃった〝予防医学的〟な面から見た歯科医の新たな役割について、当クリニックではもう一段踏み込んだ取り組みを進めようとしています。患者さんの頬の粘膜を頂き、ガンや生活習慣病などの〝かかり易さ〟を判定する〝遺伝子検査〟の提供です。すでに大阪大学の外来で同じ検査をスタートさせています。疾患によっては、口腔内にその兆候が出ている段階では相当病状が悪化しているものもあります。遺伝子検査は特定の病気へのかかり易さを患者さんが知ることで〝超早期〟の病気予防のきっかけとしていただく目的で進めています。歯の定期健診の際に、頬の粘膜を採取させていただくなど、患者さんへの負担を軽減できるのも歯科ならではの利点です。

金子　遺伝子検査は欧米などでは積極的に用いられていますが、日本での普及はこれからでしょう。高齢化の進展で、患者さん側のニーズ、高齢者の診療、治療にも有用となっていく。将来の疾病予防のために、若いうちから照準を決めて健康管理すること、亀井先生のおっしゃる通り身近になっていますね。つまり日常生活、昔から医食同源と言われ〝生活の仕方〟が成人や高齢者の健康維持にも影響大というのが明らかになっている。本学としても、遺伝子検査を含めた遺伝子治療についての研究や臨床には専門の講座を設け、人材育成、研究を進めています。新たな医療ニーズにお応えしていくため、私も全力で取り組んでいきます。

前号（13年01月号）の当該対談記事の中で東京歯科大学の創立年を〝1980年〟と表記しましたが、同校の創立年は〝1890年〟です。関係各位には訂正し、お詫び申し上げます。